

人間の五感は、変化やゆらぎに反応する。

視覚は動くものに最優先で反応していく。嗅覚も臭いの変化を感じ取る。臭いが充満している部屋に居ると、変化がないため嗅覚は消えていく。触覚も皮膚に触る変化を感じ取る。身に着けている下着を感じ取るうとしても、下着は動かず変化しないから、決して感じることはできない。

変化を感じる五感は数学で言えば、積分ではなく、微分なのだ。

変化がなく、ゆらぎがなければ、五感を動員しようがない。人の五感が働かなければ、人は感動しない。人の感動は心の作用と思われているが、感動は物理的な五感に頼っている。

人は、美しい光景や絵画を見て感動し、流れるメロディーや物語を聴いて感動する。ふっと漂ってくる匂いに感動し、変化する多様な味わいに感動し、柔らかな肌触りで感動する。それらの感動を支え

感動はゆらぎ —水辺の復活—

竹村公太郎

ているのは、全て変化とゆらぎを感じ取る五感なのだ。

人間は感動を必要とする。なぜなら、感動は変化であり、変化は生命である。感動がなく、変化しないものは死なのだ。変化に感動することが、生きていく証となっている。

戦後、日本は豊かさを求めて驀進してきた。その成果が、超高層ビルの都会と郊外の大型ショッピングセンターとなつて出現した。日本人はこのなかで、大切なものを失ってきた。それは感動であった。自分の五感で変化とゆらぎを感じる空間を失ってきた。

今、各地で、水辺の自然を回復させる動きが起きている。都市の中で、変化しゆらぐ空間は川だ。川の三面張りコンクリートを取り払い、流れと生物が行き交う水辺で感動したい。

そのような人々の思いが、都市の水辺再生の動きとなり、各地の川の自然再生の動きとなっている。(財リバーフロント整備センター 理事長)

随

Essay

